

コロナはもううんざりです！

カシミアとニットの話 ＊（七十二）

この目で確かめた、カシミアと人間の良い関係(Ⅲ)

カシミアと人間の良好な関係に、安堵と感激

内モンゴルのカシミア牧民の杜さんは、モコモコのカシミアの足をひよいとつかみ左右の前足と左右の後ろ脚をアツと言う間に縛りました。カシミアはビックリして足をバタバタ。なんで縛るんだろうと思いましたがすぐに静かになりました。

カシミアの採毛はバリカンで刈る羊の毛刈と違って熊手のような道具で長い剛毛の内側にあるつぶ毛を梳きとるんです。チルーのようにカシミアを殺す最悪のことではないことはすぐに解ったけど、今度は毛を梳かれるカシミアが痛いんじゃないかと心配でしたが、カシミアは案外おとなしい。

ひと櫛ごとにかんりのうぶ毛が獲れます。見事なうぶ毛というのが私にでも分る長くて細く柔らかい毛です。これまでの疑問や危惧していたことを正直に杜さんに訪ねると、杜さんは私の失礼な質問にもニコニコ顔で答えてくれました。

（うと） カシミアはほんとうに虐待されてないの？

（杜さん） カシミアはずっと一緒に生活している我が家の大事な家族で財産。週末になって寄宿舎から帰ってきた娘たちの一番の遊び友達だから虐待なんてあり得ない。

（うと） カシミアの毛を強制的に採っていないの？

（杜さん） このうぶ毛は冬毛で、夏になると自然に生え変わるのを人間が貰っている。

（うと） 毛を梳かれるカシミアは痛くないの？

（杜さん） 自然に抜け落ちるぐらいなので梳いても痛くないし、人間が梳かないと自然に落ちるか、岩などに擦りつけて毛を落とそうとする。そのような毛は砂が入ったり痛んだりするので今の時期に梳いてあげるのがカシミアにとっても良い。

（うと） なぜカシミアの足を縛るの？

（杜さん） 足を縛るのは、山羊はヒツジのようにおとなしくないので暴れて人間が怪我をしないように軽く縛るだけ。だからすぐにおとなしくなる。

なんでそんなことを聞くのかという表情で話してくれました。

実際に毛を梳かれている時はおとなしく、トローンとした目を見ると気持ちよさそうに見えるのです。

うぶ毛を梳かれたカシミアはさっぱりして、床屋さんに行った感じです。屋近くになると5月でも屋外の気温は30度を越えています。空気が乾燥しているので汗は

出ないけど陽差しは強く、光はとっても眩しい。これからは40度を越すような日が続くので冬毛のままではそれこそ可哀想です。

今までの疑問が氷解して、改めて毛梳きを体験させてもらいましたが、恐る恐るやると『それじゃ逆にカシミアが可哀想』と笑われてしまいます。

5分もすると腕がパンパンになってきます。杜さん夫妻の手つきはさつさつとリズム良く梳いて小一時間ほどで梳き終わります。

テレビで見たヒツジの毛刈りは一頭5分ほどですが、カシミアのうぶげの収穫はとても重労働です。

「300頭近いカシミアの毛を梳き採るのは大変です。ねと労うと、このために一年間育てて来た苦勞が報われる仕事だから、もつともつとやりたいよー」とニコニコ顔だ。

今回ここに来るまで頭の片隅に、「ひよつとすると人間のためにカシミアが強制的にうぶ毛を取られることがあるかもしれない」という危惧があったので、牧民とカシミアの良い関係を視て、僕らの仕事はカシミアの犠牲の上で成り立っているんじゃないかと、あの可愛いカシミアにとっても良い事だと知って心底安心し嬉しくなりました。これでカシミアを生涯の仕事にして行くことに自信を持ちました。

このカシミアと人間の良い関係を知ったのが今回の旅の一番の収穫でした。



15億枚という
悲しい廃棄の
衣料品



「衣料品が毎年15億枚も廃棄される」というショッキングな報道がありました。ファッション業界のビジネスが社会問題になっていますが、残念ながらこれが巨大なファッションビジネス業界を支えているのが現実です。

プレタポルテなどの華やかなコレクションは流行やトレンドを発信すると報道されていますが、元々の目的はバイヤーに来てもらい、彼らに披露して仕入れのご注文を頂くことが目的で、あの華やかなファッションショーの裏では厳しい受注合戦があるのです。

バイヤーたちはそのショーを基に次シーズンの売上の仕入れ発注をするのです。なぜなら、アパレル（ブランドのスポンサー）は注文品を製造しなければなりません。その製造期間が半年はかかるので、8月9月に立ち上がる秋冬物のショーを2月や3月にやらなければならぬのです。

半年も前から発注するバイヤーは大きなリスクを負います。そのリスクを低減するためにもイメージや話題を作らなければなりません。それには華やかなショーを演出し宣伝をする莫大な費用が掛かるのです。

「見込み生産、売減らし、残品バーゲン」のサイクルは、ファッション業界の苦しい宿命で、ショーは新しいデザインを披露することで前年のファッションの服をあたかも「あれはもう古いのので今年の商品を買って」と言っているようです。毎年新しい商品を買ってもらうことで巨大なファッションビジネスは維持されてきました。

物が乏しかった時代の大量生産大量消費は社会に貢献したと思います。しかし物余りの時代になった今は、気に入ったものを大事に長く愛用する「量より質」の時代に入っていると思います。

売り場にも出してもらえず廃棄される膨大な量の新品の服があると聞くと、もったいないを通り越して悲しいとさえ思います。

UTOのビジネスの基本はオーダーです。お客様の要望でお作りするので、一着も廃棄しません。

例えばサンプルも本番の最高級のカシミア原料で作ります。正規販売しないと言うだけで商品に遜色は全くありません。そのサンプルはアウトレットになった理由を書き、訳あり価格で販売しています。これこそ本来のアウトレットだと思っています。好評で待っていてくれる人がいらつしやるほどのです。

最高の素材を使い、職人が一枚一枚丁寧に作りお客様にお届けするのは大きな経済には貢献していないのかもしれないけど、SDGsの基本だと思っています。

想い出のホテルを旅する(七十二)

元 旅行屋のお勧め 銀川(インチョワン)・中国
寧夏国際飯店

カシミアはヒツジではなくカシミア山羊です。そのカシミアがいるのは中国の内モンゴルやモンゴル共和国や中央アジアの国々の高地で、その中で最も上質のカシミアを産するのが中国の内モンゴルです。

その世界最高峰のカシミアを求めて訪れたのが寧夏回族自治区の銀川(インチョワン)という街。ここは内モンゴル自治区やモンゴル共和国などからのカシミア集散地と言える街です。

初めてここを訪れた時は放牧の現場や糸になるまでの加工場を巡って、あつという間に時間が過ぎて仕事をするだけの街でした。三度目の銀川詣で、「せっかくなので来たんだから銀川の史跡を案内しましよー」といって頂き、訪れたのが西夏王国の史跡で寧夏の歴史に触れることが出来ました。

貧祖な私の中国歴史の知識の中の西夏王国は、北方謙三の時代小説「水滸伝」や「楊令伝」ぐらいなんです。西夏王国が栄えていたのは中国の宗時代。西夏王国は中国史では外敵の地として語られています。この宗の時代に両国は何度か衝突しているようです。また、北のモンゴル帝国とも対立し、最後はチンギスカンに侵入され西夏王国は滅されてしまいました。

中国から日本に帰ってから西夏王国が出てくる井上靖の「敦煌」を読みましたが、当時銀川は興慶と呼ばれ、仏教文化の華開く砂漠のオアシスの都として描かれています。緑あふれる美しい都市を思い浮かべましたが、実際に訪れた西夏史跡は、砂漠の中に崩れかかった砂の遺跡からは緑の街は想像できず歳月と自然の厳しさだけを実感しました。

三度の銀川滞在全てが現地手配でこの寧夏国際飯店のような超高級ホテル。日本ではこんなラグジュアリーホテルには泊まる身分ではなくなんとなく居心地が悪く、つい昔の旅行屋の性が出て、「現地の人が泊まるホテルを経験してみたい」とお願いしました。

そんな私のリクエストに、「必ずノミやダニの総攻撃に逢うし、日本に帰ってから家の人に迷惑をかけるからやめた方がよい」と、即座にダメが出ました。1950年代の子供の頃、みんなで泊まりに行った先でノミの攻撃に合って、かゆいかゆいと大騒ぎしたことを思い出しました。



この寧夏国際飯店の特筆すべきは朝食。日本で言うフエスタイルで、何人かの料理人がかなり凝った料理を目の前で料理を作ってくれる豪華版で、私の日常とはかけ離れたホテルでした。